

感じ、考え、夢中になって遊ぶ幼児を育む
～友達との関わりを大切にした保育者の援助を探る～

岩手県 北上市立黒沢尻幼稚園
園 長 山本 ゆかり

1 主題設定の理由

本園は北上市の中でも都市部に近い住宅地に位置し、近隣には小学校があります。地域唯一の公立園であり、3年前に現在の園舎に新築、移転しました。コロナ禍で、様々に制限がされた生活の中、新しい園舎での生活は、子ども達にとっても、保護者にとっても期待が寄せられるものでした。もちろん、私達職員も期待して生活をスタートしました。

昨年の5月にアフターコロナとなり、これまで制限されていたことを少しずつもとに戻していこうという動きになりました。本園でも、日々の生活や行事など、慎重に協議しながら進めてきたところ です。

そのような中、継続して取り組んでいる園内研究において、子ども達の現状を捉え、テーマを協議していた時のこと、「子ども達は、夢中になって遊んでいるだろうか」と話題になりました。本来、子どもは好きなことでじっくりと遊びに没頭するはず です。しかし、目の前にいる子ども達はどうか。そんな当たり前の姿が、目の前の子ども達と重なりません。実は、私達には一つの不安がありました。それは、コロナ禍おける生活スタイルが、幼児の成長や発達に影響を及ぼしてはいないか、ということでした。この数年で起こり続けた変化は、子ども達が成長していく過程で大きなものになるかもしれないと感じた時、本園では、ここからもう一度子ども達の姿を観察して捉え、育てたい姿を明確にして取り組むことにしました。

2 取組の具体

(1) コロナ禍における本園の幼児教育を振り返る

令和2年度 「子ども達の経験を保障する」

マスクの着用、手指の清潔、3つの密（密閉、密集、密接）の回避の励行

園生活でもマスクの着用が必要となり、生活や行事において密集したり密接になったりすることがないように意識して環境を整え、行事の縮小開催や中止など、感染しないため（命を守るため）の予防策をとり生活しました。

〈中止をしても、縮小開催をすることになっても、子ども達の経験を保障しよう〉

「親子バス遠足」を中止しました。その際に、職員と「なぜこの行事をしてきたのか」、「子ども達の成長にどんな効果をもたらしていただろうか」と、「親子バス遠足」をしてきた意味を話し合いました。

当日には保護者同士の交流がある・・・けれど、そこではない。遠足に向けて、年長児を中心に体操に取り組みます。年長児が年中児や年少児に呼びかけて体操を始め、一緒に体を動かしながら小さい子へ関わることで、年長児としての意識を育てていました。年中、年少の子ども達はそんな年長児の姿に、「来年は自分たちが」と思ったり、優しさを感じたりしながら生活を安定させ、遠足への期待を高めていました。そのことを理解した時、遠足が中止でも「異年齢交流をしていこう。」と共通の思いをもち、異年齢の小集団を作り、様々な職員が関わりながら制作活動や行事をしていきました。

このことは、私たち自身が、子ども達が経験していることを、本質で再考するきっかけになりました。

令和3年度 「保護者参加の行事の意味を考える」

マスクの着用、手指の清潔、3密の回避の継続

新園舎への引っ越しを8月に控え、旧園舎での最後の行事になる「夕涼み会」を、保護者と一緒にお別れする会にしようと準備をしていた最中、感染症が全国的に拡大した状況を受けて、子ども達だけで行う内容に変更しました。降園の際、天候もよく外で帰りのあいさつができると判断し、保護者と一緒に盆踊りだけはしようと、保護者と子ども達に伝えました。保護者と喜んで踊りだす子ども達とそれを動画に収める保護者の笑顔を見て、園生活を送る子ども達の姿を保護者と共有することの大切さを改めて感じ、2学期行事の検討が課題になることを痛感しました。

2学期、新園舎引っ越し、これまでよりも更に広がった園庭での運動会に保護者の期待も膨らんでいるのがわかりました。しかし、感染の拡大は治まらず、保護者参加について県や市から延期や縮小、ついには中止についても検討するように周知されました。私達は保護者が参観できる方法を探り、開催方法の変更、雨天時の開催場所の変更、学年ごとの開催方法など、あらゆる状況に対応できるよう検討しました。夕涼み会で痛感した「幼児の成長発達に、保護者の喜びが必要」であることを実感した経験を生かし、保護者の思いも大切に運動会開催を目指し実践しました。保護者の目の前で力を発揮した子ども達が、家庭でも誉められ認められて、次への意欲を芽生えさせたこと感じ、教職員もまた意欲をもって生活を進めていきました。

令和4年度 「子ども達の経験を保障するための教職員の挑戦」

感染症予防のための生活スタイルの継続 濃厚接触者の制限

前年度末からの感染症拡大のため、新学期早々、入園式からの検討が必要でした。この年は、医療機関の機能も危ぶまれるほどの拡大が続き、濃厚接触者の家庭保育等も打ち出され、子ども達ばかりではなく保護者、職員も、健康でも登園や出勤ができないという制限がされた中で生活しました。園内での感染症の発生を防ぐために、大切にしていた学年間交流や異年齢交流を制限する必要も出てきて、とにかく日々安全に預かることに集中していたと思います。マスクを外した生活が奨励されても、予防にはマスクが最善という思いから、保護者の要請もあってマスクをしたまま生活することも多くありました。経験を保障することを継続していたものの、この年ほど子ども達だけの行事についても検討した年はなく、職員の挑戦が続きました。

令和5年度 「感じ考え、夢中になって遊ぶ幼児を育む ～友達との関りを通して～」

5月、新型コロナウイルス感染症が5類となるのに伴い、感染症対策や制限の緩和

これまでの3年間、様々な制限の中でも子ども達の経験を保障しようと検討し実践してきました。緩和されたとはいえ予防や対策は必要なため、園としての生活スタイルや予防方法をその都度検討しながら進めてきました。これまでなかなか交流ができなかった小学校とや保育園との交流も、スタートできると感じていました。

例年、新学期がスタートして数週間がたった頃に、子ども達の姿からその年の研究テーマを決め、実践していきます。子ども達の実態を話題にすると、

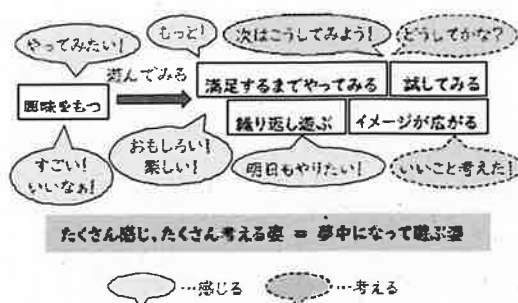
- 好きな遊びを思い切り楽しむ幼児がいる中で、遊びたいことを見つけられずにいる子がいる
- 片付けの時間になるとすぐに片づけ始める姿があり、遊び込めていないのではないだろうか
- 面白い考えがあり、その考えを実現しようと保育者に伝えてくる姿はあるが、友達に対して伝えたり一緒に遊びだそうとしたりする姿は少ない、と挙げられました。

そこで、友達と関わることで様々な考えに触れ、これまでよりも幼児自身がたくさん感じ、考えながら、夢中になって遊んでほしいと思い、取り組むことにしました。

始めに、主題と副題について、教師間で共通理解を進めました。感じる、考えるについては、辞書を参考に感じるは、「様々なものを見たり聞いたりした時に生まれる心の動き。五感を通して強く心が動くこと。」、考えるは、「知識や経験などに基づいて、筋道を立てて頭を働かせること。新たなものを工夫すること。思いつくこと。問いを持つこと。」捉えました。

感じ、考えるについては、「人や物に主体的に関わりながら様々に心を動かし、自分なりのやり方で楽しむ。今までの経験を思い出したり、疑問に思っ関わったりしながら、遊ぶことを楽しむ。」と捉え、この姿を年度の終わりに目指す幼児の姿として進めることにしました。

園内研究では実践事例から幼児の姿を教師間で読み取りながら環境の再構成と、援助を探ります。その中で子ども達の変容を共通理解し、援助の方向性を共通にしながまた実践をしていきます。繰り返し話題になったことは、子ども達の姿が「年齢に応じた遊びになっていないこと」、「友達との関わりがもてていないこと」でした。「5歳児だったら、もっと・・・」「4歳児なら、こんな姿もあっていいよね・・・。」と、子ども達の姿と発達過程にギャップを感じていました。



コロナ禍での生活を理由にはいけないと思いつつ、マスク生活を継続し、人との関わりに制限を設けたことは事実です。子ども達の育ちを「なぜ」と考える前に、「コロナ禍さえなければ」と思う前に、子ども達の今の姿を受け入れて、「必要な経験は何か」「私達保育者はどのように関わるとよいのか」そのことを中心に考え実践していきました。保育者が一人一人に目を向け、子ども達が興味や関心を向けて遊びを楽しめるように、日々の保育を話し合い、実践しては振り返りまた実践していきます。そして、少しずつ、子ども達が面白いと感じる遊びで繰り返し遊び、考えたことを試し、難しいと感じた時には友達を真似、友達に聞いて試しながまた遊び、自分の考えを広げていく姿につながり、夢中になって遊ぶ姿に変容していきました。

この実践は、令和5年度岩手県国公立幼稚園・こども園教育研究大会で、本園の研究主任の高橋清香主任教諭が発表しています。また、令和6年度全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会北海道大会でも、岩手県国公立幼稚園・こども園協議会の推薦を受け発表してきました。

幼児が興味あることを繰り返し楽しみ満足すると周りにも目が向くようになること、友達の思いや考えが加わると「感じ考える」姿がより増えること、このような体験が積み重なることが深い学びへとつながっていくと改めて学び、この姿がいずれ小学校教育への基盤になると思っています。

今年度 「感じ考え、夢中になって遊ぶ幼児を育む ～言葉のやりとりを大切にした援助を探る～」

そして今年度は、昨年度の学びを基に、子ども達の姿を捉えて実践を重ねています。保育者を頼りにし友達との遊びに発展しにくい姿や、教師に向けた会話で満足し友達には一方的に思いを伝えたり思いを言葉にできずにいたりしている姿から、「友達と」感じ、考え、より夢中になって遊ぶ幼児となるよう、子ども達の言葉のやりとりを大切にした関わりが育めるよう、保育者の援助が援助についてどうあればよいかを実践し探っています。

友達と夢中になって遊ぶようになる過程を保育者間で共通理解するため、本園としてのステップ表を作成しました。それを基に幼児理解、必要な経験の予測と方向性を検討しながら実践でき有効でした。ステップ表に照らし合わせた時、この表と姿が重ならない幼児がいましたが、昨年の経験があるため、保育者はその子の姿をあるがままに受け止めました。そして、その子にとって必要な経験を探りながらここまで過ごし、今、友達とのやりとりを楽しむまでになっています。

やりとりが生まれるためには、教師との安定した関係が土台となること、教師を拠り所としなが好きな遊びを楽しみ様々なことを感じ、考え、「伝えたい」という思いが生まれることを、実践を通して感じるとともに、忘れてはいけない感覚だと思っています。

3 取組の結果

これまでもを振り返りながら、もし、コロナ禍を経験することがなかったらと思うことがあります。

もし、これまでのように当たり前で過ごしていたら、子ども達は他者との関わりも、言葉でのやりとりも、出来ていたのだろうかと考えることがあります。命や健康を脅かす感染症、不安定な生活を余儀なくされたことを思うと、経験しなくてもよい経験だと思っています。

しかし、この生活があったからこそ、これまで私達が営んできた幼児教育と保育を、根底から考えさせられた機会になりました。そして、当たり前ということではなく、私達保育者は、現状の子ども達の姿から目指す姿への変容を願って常に実践を重ね、学んでいかねばならないと改めて思いました。

4 今後に向けて（園長の立場から）

昨年度から継続している「夢中になって遊ぶ幼児を育む」への取り組みについて、園内で共有したことを保護者へも周知し、子ども達の成長に欠かせない人との関わりについて理解を広げたいと思っています。保育者でも疑問にした「まだこの姿なの」という捉えを、ここからどのように援助するかが大切と考えられるように、見守っていくことの大切さを感じていただけるように、役目を果たしていこうと思います。

＜友達と夢中になって遊ぶようになる過程＞ (ステップ表)

	幼児の姿	必要な経験	教師の援助と環境の構成
ステップ1	教師と自分のしたい遊びを見つけて、満足して遊ぶ姿 例えば 「むっくりくまんしたい。」とクマ役をくじで選んで遊び始める。水分補給をした後も「次は…」と幼児から声が出て、始める。	・教師との信頼関係を築く ・基本的な生活習慣（食事・排泄・着脱・生活リズム）を身に付ける ・十分に全身を動かす体験（座る・立つ・しゃがむ・登る・降りる・走る・歩く等を含めた遊びや運動） ・部屋やホール、園庭の散策（何があるのか、どんなもので遊べるのか） ・教師を仲立ちとして並行遊び→1, 2人で見立て遊び→3人以上でごっこ遊びに向かう ・教師の真似をしていろいろなコトをし、モノを使ってみる ・担任、クラスの子→学年の子→異年齢児、教師、園外で地域の方との関わり	・一緒にいて安心する、一緒に遊んでくれるなど「一緒に」を軸に信頼関係を築けるような援助や環境構成。 ・基本的な生活習慣が、教師の見守りや援助の中で身につけられるよう、個々に合わせて援助等の仕方を工夫する。 ・生活する中での動き等を観察して、リズム運動や固定遊具など学年に応じた十分に体を動かす運動を教師も一緒に取り組んでいく。 ・教師と一緒に散策し「幼稚園に何があるのか」「どんなもので遊べるのか」を見て知り、教師も幼児と一緒に体験して幼児の興味関心を広げていく。 ・幼児のつぶやき、発想など遊びに変えられるような、学年、年齢に合った環境構成・援助。 ・園内のいろいろな幼児と関われるように、教師間で共有し合う。
ステップ2	教師を支えとした小集団で、興味のある遊びを繰り返し楽しむ姿 例えば 種類を変えながら繰り返し楽しむ。（鬼ごっこ→手つなぎ鬼→助け鬼…のように）。	・友達と同じようにやってみようと挑戦する ・同好の友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう ・失敗やうまくいかないことに諦めずに取り組む ・自分の思いを伝えたり相手の思いに気付いたりする。葛藤体験 ・遊びに必要な物やことに気づき、遊びに取り入れる	・友達のしている遊びを知らせたり、触れたりできるような場を作る。 ・それぞれの遊びをつないでいき、いろいろな友達との関わりが広がるようにする。 ・困難にぶつかった際には、スモールステップを提示したり関心をなくさないよう励ましたり、言葉掛け等を工夫していく。 ・教師が仲立ちしながら、互いに思いを出し合えるようにしたり時間を確保したりしていく。
ステップ3	友達と同じ目的に向かって工夫したり、協力したりしながら遊びを展開する姿 例えば 自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりしながら、一緒に遊びを進める。「明日もやろう。」と継続して遊ぶ。 ・お店屋さんごっこ…意見やアイデアを出し合い進め、役割分担をする ・サッカー…友達と作戦を立てる。チームの子に教えたり、助けたりする	・自分のイメージを友達に分かりやすい言葉で伝える ・自分とは違う思いやアイデアがあることを知り、その思いを受け止めたり、面白さに気付いたりする ・本物らしくして、イメージを実現させていくことを楽しむ ・自分や友達の思いを共有し、取り入れながら遊びを発展させていく ・友達と一緒に遊ぶことで励まし合ったり、充実感を得たりする	・振り返りの時間を持ち、幼児が思いを話しやすくしたり、友達の思いやアイデアに気付いたりできるようにする。言葉を引き出し、自信をもって伝えられるよう励ます。 ・互いのアイデアやよさを認め合える雰囲気を作っていく。 ・幼児の思いを聞き出しながら、一緒にイメージを実現していく楽しさを味わえるようにする。 ・幼児の言葉からそのよさをひろい、周りの子にも具体的に伝える。 ・二人組やグループ、小集団で活動する機会を作り、やり取りをしながら楽しめるようにする。やり遂げた達成感を感じたり、友達や教師と共感したりできるようにする。